

襟立玉英 ポーランドかな書道講義の旅

私が村上福壽郎君と68歳の時に設立したヒューマン・スマート社で書道塾を開催することになった。講師は高校同期の書道家、襟立玉英さんである。同級生の村上君、岸川登君、瀧梢さん、伊藤淑子さんと私が習うことで始めた。襟立さんは大学卒業後、高校の書道教師を勤める傍ら日展に応募し、毎年入選されている。襟立さんを入れて同期生6人を中心に知人も加えて10人くらいで書道塾は始まった。月に2回の練習は楽しく練習中もおしゃべりが絶えない。お菓子の差し入れもあり、楽しんでいるうちに終わってしまう。終了後は近くの居酒屋で練習時間と同じくらいの時間で懇親会を行っている。懇親は図れるが書道の上達は遅い。

仲間にITの専門家がいて先生のホームページを作ることになった。画面に先生のこれまでの作品が並べられた。カレンダー形式に合わせて有名な俳人の俳句を添えて先生の書が掲げられ、英訳を音声で聞くことが出来る。俳句の英訳は瀧さんが担当した。個人の書道家としては立派なホームページである。

ある日、このホームページからヒントを得て先生のカレンダーを

作ろうということになった。毎月花の写真に俳句と先生の作品が掲載されている。1000部のカレンダーが友人や弟子をはじめ多くの人々に配られた。岸川君は勤務しているオークハウスでカレンダー500部を購入してくれた。大阪での新年会の集まりでは参加者に配って見ていただいた。36会の臼田皓一君はカレンダーの2月と4月分の襟立さんの直筆を購入してくれた。

半年が経った頃、東欧ポーランドのワルシャワ大学で先生にかな書道の講義をしてもらえないかという依頼が入った。日本語学科の学生に対する講義だから日本語で講義出来る。謝礼はなしで旅費はこちら持ちだが先生はやる気になった。我々は先生が行かれるならご一緒しようということになった。

私の知人に元外交官で在ポーランド日本大使を務めた人がいる。早速、相談したら現地の大使館に連絡していただき、大使館付属の広報文化センターでワルシャワの方々相手に同様のかな書道の公開講座を実施することになった。こちらは通訳が必要である。

平成30年4月3日、総勢12名でポーランドに向かった。翌日ホテルから徒歩でワルシャワ大学に到着した。早速、仲介者の

津野田氏と襟立先生でかな書道の講義が始まった。書道の中でもかな書道は芸術性が求められる。ひとつひとつの文字は勿論の事、全体の美しさが大切である。そのため墨の濃淡や、文字の配列、線の調和などが重視される。講義ののち色紙を使って実際に書くことになった。

2時間程度の講義であったがかな書道の入り口くらいはわかっ
てもらえたのではないかと思えた。出来上がった作品は初めてに
してはなかなか立派なものだった。

午後からは在ポーランド日本大使館付属の広報文化センター
で同様の会を行った。ポーランドの人を対象にしたワークショップ
であった。事前の申し込みは5名と少なかったから我々が座って
生徒になればいいと考えていた。実際は31名の参加者があり、
大盛況であった。ワルシャワ大学で講義を受けた学生も何人が
参加してくれて関心を持ってもらったのかと嬉しかった。ここでも
作品を額に入れそれぞれに持って帰ってもらった。

会場にはチョーヤ梅酒の駐在員が梅酒を持参して希望者にふ
るまってくださった。社長の金銅さんとは旧知でポーランド行きを
お話したらこの場を手配してくださった。梅酒はポーランド人にも

好評であったが、まだまだ普及していないとのことだった。

先生は翌日もワルシャワ大学の大学院の学生相手に講義を行われたが、私を含めて数名は折角の機会だからとワルシャワの市内観光に出かけた。

ワルシャワはドイツやソ連に攻められて町が破壊され、その後再建されていた。美しい街並みが我々の目を奪った。建物と道路が調和しているのが目に付く。特に市内には電柱がなく、素晴らしい街並みを形作っていた。

NTT 勤務時代に経済的な理由から多くの電柱を立てて景観を壊してきたことを反省している。田舎はともかく都会の電柱は無くしていかないと美しい街並みは作れない。

4 日目にポーランド南部のクラクフを訪ねた。この町はポーランドの京都とも言われている古都である。中世のまま町が保存されていて時代を超えて昔に戻ったようだった。

クラクフの日本美術文化博物館“マンガ”館はフェリクス、マンガ、ヤシエンスキ氏から寄贈された浮世絵や掛け軸、屏風、鎧、兜、刀剣などを稲盛財団の京都映画賞を受賞したアンジェイ・ワイダ氏とその賞金で展示館を建てて展示している博物館で、茶

室も設けられている。茶室に襟立先生の書かれた掛け軸の寄贈を申し入れたところ、こころよくお受けいただき、今回贈呈式を行うことになった。ポーランド人の皆様がお茶をたて、手作りの茶菓子で私たちをもてなしてくださった。



(右端は筆者、その左は襟立玉英先生)

贈呈式を終えて私たちはバスに乗り、アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所へ向かった。第2次世界大戦中、ヒットラーの命令で戦争遂行の工場生産のための労働力確保と労働に適さない人々や人種浄化策として100万人以上の人々がガス室に送ら

れ殺害された。博物館には収容者の服や靴などの遺品、人間の髪の毛などが山積みになっていた。建物などの写真撮影は自由であったが毛髪などは人間の尊厳あるものとして撮影を遠慮してほしいと告げられた。解説者は博物館に勤務する日本人だったが、彼の言葉をしみじみと聞いた。ヒトラーは選挙によって民主的に選ばれた総統であるということだった。あの狂気の沙汰の実行者はドイツ国民の選挙によって選ばれていた。

国連はこの施設を若い学生たちに見せるよう各国に働きかけ、収容所には多くの学生たちがやって来ていた。戦争を再び起こさないようにとの教育的施策であった。

私たちのポーランド訪問は文化によって他国民とも理解しあえるという文化活動を目的として実施した。日本文化の普及という面は平和な時代であってこそ実現したことである。その訪問国で先の大戦で犠牲になった人々の遺品を拝見した。この落差は大きかった。平和を守り、世界の人々が文化を通じて交流できる喜びを感じることが出来た旅だった。

下野讓